

教室歴

人体病理学教室は、基礎医学講座であった病理学第二教室と臨床検査医学教室から独立した病理部門が合併したものであり、2015年1月、新しく臨床医学講座の1つとしてスタートした。これより、人体病理学教室は、大学附属病院において、病理診断科を標榜し、診療部門の1つとして臨床医療の一端を担うこととなった。このような改革が行われるまでの教室の歴史と変遷について、基礎医学講座としての第二病理学教室時代と臨床検査医学教室・病理部門時代および今後の人体病理学教室に分けて記述する。

1. 基礎医学講座としての第二病理学教室時代

和歌山県立医科大学の病理学教室は当初は1講座制であり、昭和21年に大阪大学より赴任した岡野錦弥が開設した。昭和22年に岡野が大阪大学第二病理学教室助教授（医学専門部教授）に戻ったため、昭和23年に北海道大学病理学教室から新井恒人が教授として赴任した。昭和32年には大学院の設置に伴い、病理学教室は二講座制となり、第一病理学教室は新井恒人教授が、第二病理学教室は教授として大阪大学から再赴任した岡野が主宰した。

a. 岡野錦弥教授時代（昭和32年～35年）

再赴任した岡野教授は、当初は第二病理学教室の研究設備が不十分であったこともあって大阪大学での研究を続けながらの勤務であった。昭和33年には基礎医学部門の新学舎が建築され、第二病理学教室の研究室が出来、教室スタッフには大阪大学から谷口春生助教（後に講師）を迎え、本格的な研究が始まった。しかし、第一病理学教室と月交代で担当していた病理解剖は症例数が少なく、また、生検材料も少しずつ集め始めた状態であった。また、研究備品は不十分で、顕微鏡1つでの研究を余儀なくされた。岡野教授の研究テーマは「病理学的表現の客観化」であった。具体的には白血病死体の各臓器における白血病細胞の浸潤密度を顕微鏡下に計測し、その部位差の有意性を推計学的に検定するという新しい方法論を肝および腎について行った。昭和34年に大阪大学第二病理学教室の安田龍夫教授が急逝したため、その後任として岡野教授が選ばれ、翌昭和35年大阪大学へ赴任した。岡野教授は二回本学へ勤務し、一回目は細胞化学を媒体とする「内分泌の機能形態学的研究」であり、二回目は「病理学的表現の客観化」であったが、いずれも岡野教授のライフワークとなった。



岡野 錦弥 教授

b. 嶋崎昌義教授時代（昭和 35 年～42 年）

昭和 35 年、岡野教授の後任に大阪大学歯学部口腔病理学教室・助教授であった嶋崎昌義が教授として着任した。転出した谷口講師に代わり、上田外幸（大阪大学）が助教授として着任した。教室の研究テーマは、内分泌病理学を中心とし、主として免疫組織学的手法や電子顕微鏡的解析法を用いた研究を行った。上田助教授はラットにエストロゲンを注射することによって下垂体腫瘍を作ること成功し、その発生過程、細胞起源の解析を行った。また、伊藤正美と向林斉の両大学院生は、内分泌学の研究に免疫組織化学の手技を導入し、hCG が胎盤合胞細胞内に存在することを示し、当時として画期的な成果であった。さらに、栗本博史大学院生は、電子顕微鏡的観察に免疫組織化学的手法（免疫電顕法）を応用し、甲状腺細胞内におけるサイログロブリンの局在について研究を進めた。昭和 39 年に助手として採用された平峯千春は化学的諸手技の確立に貢献した。塩崎梓は森陽一博士（大阪府立成人病センター）とともに橋本病血清中に細胞毒性因子が存在することを証明し、その自己抗体としての性格を明らかにし、この業績により古武賞を受賞した。さらに、勝信昭、森俊雄両大学院生は、細胞毒性因子の詳細な分画を試みるとともに、免疫電顕法により、この因子に対応する抗原の甲状腺上皮細胞内存在部位の同定に成功した。両名ともこの業績により古武賞を受賞することとなった。昭和 40 年には、上田助教授は下垂体腫瘍の研究のため、米国の Furth 教授のもとに留学し、この間、遠藤愛子が助手に採用された。研究以外の面では、講義や剖検および附属病院中央検査部の病理部門の病理診断を第一病理学教室とともに担当していた。従って、この期間は非常に多忙な時期であった。しかし、外科や産婦人科などの臨床の諸教室との間には大学院学生を通じて人の交流が密で、家庭的な雰囲気の中で漸次活気を帯びて運営されていった。昭和 42 年、嶋崎教授は大阪市立大学医学部第二病理学教室の教授として平峯助手とともに転出した。



嶋崎 昌義 教授

c. 永井清和教授時代（昭和 42 年～54 年）

昭和 42 年、嶋崎教授の後任として、大阪大学第二病理学教室の助教授であった永井清和が教授として着任した。翌年、上田助教授や遠藤助手が退職し、教授以下総勢 6 名と少数になったが、早期胃癌手術材料を使った癌化機構の解明や免疫学的見地からの糸球体腎炎、特に馬杉腎炎における病因究明などの研究が本格的に始まった。昭和 44 年には、大学院を修了した勝、森および西原亨の 3 人が同時に助手となり、さらに後に第二病理学教室の教授となる斎藤晃治が大学院生として入局し、教室の人員は充実していった。しかし、この時、大学紛争により研究は完全に滞った。大学紛争が終結を迎えた後、永井教授はリンパ球機能に

関する研究にも着手し、早期胃癌、馬杉腎炎とともに教室の研究課題の三本柱となった。昭和 45～49 年には、森助手が講師に昇任し、重地元茂、斎藤、江本正直、松森武、玉置信彦が順次、助手となり、大学院生も多く、教室は活気づいていった。教室の研究テーマは、早期胃癌研究からリンパ球機能の研究に移行し、特にトランスファーファクターに着目した。助手から昇任したばかりの斎藤講師を、続いて玉置助手を米国ラットガース大学ワックスマン研究所、ゴットリーブ教授のもとに留学させ、トランスファーファクターの共同研究を開始した。斎藤の帰学後、教室のトランスファーファクターの研究は急激な発展をとげた。昭和 50 年以降、山本富一、日比紀一郎、西原（再任）、楠山洋司が順次、助手となった。永井教授は学生教育に極めて熱心で人一倍厳しかったが、情熱的で人情味の厚い性格は教室員や学生の尊崇を集め、教授を慕って毎年多数の門下生が集まった。講師から昇任した斎藤助教授、米国から帰学した玉置助手、多数の大学院生を加え、数々の研究成果があげられた。馬杉腎炎の研究においては、内因性グロブリン・補体・細胞性免疫の果たす役割、蛋白尿の出現機構と糸球体基底膜構成成分の変化、特に上皮細胞表面電荷や磷脂質各分画の変動との関係の証明など、多くの新知見が得られた。また、トランスファーファクターの研究においては、トランスファーファクターを含む白血球抽出物中に多くの生物活性物質の存在を明らかにし、特に遅延型過敏反応を増強する非特異的活性成分の存在の証明は各方面から注目を浴びた。

研究以外では、附属病院中央検査部の病理部門の業務は、永井教授が就任した当初は、第二病理学教室が担当したが、昭和 43 年に附属病院中央検査部の病理部門に専任職が誕生したため、その業務は第二病理学教室の手を離れた。しかし、その後も、附属病院中央検査部の病理部門の専任職が空席になる度にその急場を第二病理学教室が凌ぐこととなった。

昭和 54 年、永井教授は在職 12 年目を迎え、第二病理学教室は最盛期を迎えていたが、同年 6 月 10 日突然倒れ、12 日永遠に帰らぬ人となった。病理解剖により、前交通動脈瘤破裂が死因であることが明らかにされた。永井教授の研究は形態学という、ある程度固定した場に生化学的知識を動員して疾患の動的変化を把握することによる病因究明を目的とし、それが正に開花しようとするときの死であった。昭和 54 年 12 月、第一病理学教室小田富雄教授が退職し、第一・第二病理学教室とも教授不在となった。



永井 清和 教授

d. 斎藤晃治教授時代（昭和 55 年～平成 1 年）

昭和 55 年、故永井教授の後任として、斎藤晃治助教授が教授に昇任した。このとき、玉置信彦講師、西原亨助手、楠山洋司助手らスタッフに加え、多数の大学院生が在籍していた。昭和 57 年以降、大野友彦、坂辻喜久一、西本行夫が順次、助手となった。教室の研究内容は永井前教授時代から連続したもので、免疫病理学的アプローチによる馬杉腎炎発症のメカニズムの究明、トランスファーファクターを含む白血球抽出物中の生物活性成分の同定とその作用機序の解明、さらには遅延型アレルギーの抑制機構、インターロイキン 1・2 の産生機序などの研究が進められた。特に、トランスファーファクター研究では、米国ツウーレイン大学ゴットリーブ主任教授との共同研究を続けるとともに、昭和 56 年には斎藤教授らが中心となって全国レベルにおけるトランスファーファクター研究会を立ち上げた。特に SSPE、B 型慢性肝炎、掌蹠膿疱症におけるトランスファーファクターの臨床的有効性は広く知られるところとなった。昭和 57 年に第 10 回日本臨床免疫学会が開催され、「免疫学的治療法の現状と展望」と題するシンポジウムにおいて、斎藤は教室におけるトランスファーファクターの基礎的研究と臨床応用の成果を講演し好評を得た。さらに、昭和 58 年に開催された第 5 回国際免疫学会において、「トランスファーファクターを含む白血球抽出物」のワークショップをゴットリーブ教授とともに主催し、日本におけるトランスファーファクターの研究の成果を世界に紹介した。研究以外では、昭和 57 年に附属病院中央検査部の病理部門に中峯寛和助手（後に講師）を移籍させ、昭和 59 年に新設された和歌山労災病院検査科部長に楠山を派遣するなど、病理診断分野の充実にも尽力した。

年号が変わった平成元年、斎藤教授は在職 9 年目を迎え、教室は充実期を迎えようとしていたが、3 月に胃癌に罹患していることが判明し、わずか、その 4 ヶ月後の 7 月 10 日に永眠した。急なことであったため、和歌山労災病院に派遣されていた楠山が講師として戻り、栗林恒一講師とともに教室の業務を担当した。坪田ゆかり助手は、楠山と交代し、和歌山労災病院検査科部長に転出した。



斎藤 晃治 教授

e. 覚道健一教授時代（平成 2 年～平成 23 年）

急逝された斎藤晃治教授の後任として、東海大学医学部の覚道健一助教授（和歌山県立医科大学・昭和 48 年卒）が教授として着任したのは平成 2 年であった。覚道教授着任時に在籍したのは、栗林講師、楠山講師、森川吉博助手であった。平成 2 年には松浦成昭（大阪大

学)が助教授に赴任した。平成2年-8年には、射手矢巖、河野一郎、宇都宮洋才(東海大学)、中村靖司(筑波大学)、久智行(大阪市立大学)、中村美砂が、順次、助手として採用された。また、平成4年以降、多数の大学院生や研究生が入局するようになり、研究活動が活発化した。覚道教授の研究テーマは内分泌病理学であり、特に甲状腺病理学の研究に力を入れ、甲状腺専門病院である隈病院(神戸市)と共同研究を行うなど、精力的に研究を進めた。その後、平成6年には呼吸器病理学を専門とする横井豊治(名古屋国立病院)が講師(後に助教授)として、平成11年にはその後任に森一郎(東海大学)が助教授として着任した。また、尾崎敬と安岡弘直が大学院修了後、助手となった。平成16年に中村(美砂)助手は講師に昇格し、分子病理学的研究の中心的役割を果たした。平成18年には、若狭朋子(大阪市立大学)が講師として着任し、中込奈美、谷口恵美子が順次、助教となった。また、覚道教授は、留学生、特に中国・山東医科大学からの留学生の育成に熱心で、単良、荆雪楓、唐衛華、汪筱娟、韓博、左揮、白艶花、李亜琮、楊其峰、劉志艶ら、多数の留学生を受け入れた。彼らは帰国後、中国の各大学で教授等の役職を得て活躍している。そのため、覚道教授は、山東医科大学(山東大学医学部)より、客座(客員)教授の称号が授与された。

平成10年、大学は紀三井寺キャンパスに移転し、教室は研究設備の更新、特に分子学的研究のための体制を整えた。平成17年には大学が再編整備され、大学講座名を病理学第二教室、大学院講座名を人体病理学と名称を変えることとなった。この間、覚道教授は、学内で附属図書館長や学生部長、和歌山県立高等看護学院学院長を歴任し、図書館や学生教育の充実に貢献した。また、覚道教授は、多くの学会活動にも熱心で、日本病理学会理事や近畿連合会会長、診断学推進協会専門医会会長に選任された。さらに、第27回日本臨床細胞学会近畿連合会学術集会(平成13年)、第9回日本内分泌病理学会(平成17年)、第52回日本病理学会秋期特別総会(平成18年)、第49回日本臨床細胞学会秋期大会(平成22年)を会長として主催した。

病理診断の面では、県内の地域病院の病理診断を幅広く行い、質の高い病理診断を市中病院に提供するように尽力した。特に、細胞診に熱心に取り組み、稲垣充也、佐藤小百合、林志保をはじめとする多数の細胞検査士が所属した。また、森助教授が中心となり、新宮市医療センターに病理検査室を開設し、平成15年には尾崎助手が病理部長として赴任した。大学附属病院においても、中央検査部病理部門の中峯寛和講師と小野一雄助手の退職に伴い、その業務を第二病理学教室が引き継いだ。まず、平成16年に森助教授が臨床検査医学教室へ転籍し、中央検査部次長となり、新宮市医療センターより帰任した尾崎も、臨床検査医学助手として、病理診断業務に加わった。その後、中村(靖司)講師が、助教授の昇進後、平成18年に森と交代し、臨床検査医学准教授へと転籍した。尾崎助手は、安岡弘直助手と交代し、講師として第二病理学教室に戻った。

覚道教授は、平成23年、定年を迎える前に退職し、名誉教授となった。退職後は、神戸常盤大学保健科学部医療検査学科・教授や近畿大学医学部客員教授を歴任している。覚道教授の研究的ライフワークは甲状腺病理学であり、和歌山県立医科大学在任中の120編を超える英文論文の中で約35編を占める。特に髄様癌をはじめ甲状腺癌の研究では多大な研究成果を上げた。また、創設に関わったサイロイドクラブ、甲状腺癌取扱い規約委員会あるいは様々な国際会議の一員として国内外の甲状腺研究をリードした。加筆として、覚道教室に

在籍した栗林恒一（関西医療大学）、東家一雄（関西医療大学教授）、松浦成昭（大阪大学医学部保健学科）、横井豊治（愛知医科大学病理学教室）、森一郎（国際医療福祉大学）、中村美砂（大阪河崎リハビリテーション大学）、森川吉博（和歌山医科大学第二解剖学教室）、楊其峰（山東大学）、韓博（山東大学）の諸先生方が教授になられたことは喜ばしいことである。



覚道 健一 教授

f. 村田晋一教授時代（平成 24 年～現在）

平成 24 年、埼玉医科大学・国際医療センター教授であった村田晋一が、覚道教授の後任として教授に着任した。着任時に尾崎講師は、第一病理学教室准教授に転出しており、教室員のみならず秘書もおらず、文字通りゼロからの出発となった。しかし、割栢健史助教が埼玉医科大学から、松崎生笛が大阪大学大学院から同時に着任した。村田教授は、富山医科薬科大学を卒業後、京都府立医科大学、メリーランド大学、山梨大学、埼玉医科大学で、病理診断、研究および教育に携わってきた。京都府立医科大学とメリーランド大学では主として実験病理学を、山梨大学では実験病理学と診断病理学を、埼玉医科大学では診断病理学をと、それぞれ、異なった分野の病理学を経験したことから、診断病理学、診断病理を支える基礎病理学および教育を三本柱にし、これらをうまく融和させた教室を構築したいと考えた。村田教授は、大学院卒業後、①腫瘍における組織構造異型および細胞異型の分子病理学的背景と②組織細胞的解析手法の開発と診断病理への応用を研究テーマとしてきた。しかしながら、着任後数年間は附属病院の病理診断に関わる事が出来ず、また、若手主体の教室員であったことから、病理診断学的研究、基礎病理学的研究ともに十分な成果を上げることが出来なかった。その後、糸永昌弘（第二内科学教室）や清水勇輝（附属病院中央検査部）らが大学院生として研究に加わり、**Microtubule-organizing center** と腺管構築形成の関係や人口核酸を用いた新しい遺伝子突然変異の検出手法の開発など、徐々に成果が出始めた。

一方、大学における基礎病理学教室および附属病院中央検査部病理部門の在り方も大きく変わる事となった。平成 25 年の臨床検査医学教室三家教授の退任に際して、附属病院の中央検査部病理部門は、臨床検査医学教室から離れ、病院病理部として別途創設されることが理事会で決定した。さらに、平成 26 年、岡村吉隆学長のもと、山上裕機医学部長と吉田宗人附属病院病院長らを中心とした「病理診断体制委員会」が立ち上げられ、基礎医学講座の第一・二病理学教室と病院病理部を含めた大学の病理部門の在り方が議論された。委員会の議論や教授会での審議を経て、最終的に、病院病理部を病理診断科として附属病院標榜科の 1 つとすること、基礎医学講座である第二病理学教室を人体病理学教室に名称変更し、病

理診断科を包括する臨床医学講座として位置づけることが決定された。病理診断科の科長は村田教授（旧第二病理学教室）が担当し、公募された副科長は教授会での選挙で、小島史好講師（済生会千里病院）が選出された。技師については、中央検査部（病理診断室）の所属のままとなった。人体病理学教室／病理診断科の業務としては、組織診断と細胞診断および従来は第一病理学教室と第二病理学教室が行ってきた病理解剖である。これらの業務に分子病理学的解析やテレパソロジーなど最新の手法を導入することも重要な点であった。なお、第一病理学教室（村垣泰光教授）は基礎医学講座に残り、病理学教室と名称変更し、基礎研究と教育を主体とするものの、病理診断科の業務を補助することとなった。

2. 臨床検査医学教室／附属病院中央検査部病理部門時代

昭和 27 年に中央検査部が溝口輝彦教授（第一内科学）を兼任部長として設立された。その後、昭和 52 年には前田次郎教授が初代専任部長として就任し、昭和 59 年には検査診断学教室が設立された。前田教授の退任後、しばらくの空白期間をおき、平成 11 年には三家登喜夫教授が赴任し、臨床検査医学教室となった。臨床検査医学教室・附属病院中央検査部病理部門の設立には、正木伸准教授（第一病理学教室）が関与し、病理診断の実務は、第一・二病理学教室が交互に分担していた。その後、第二病理学教室に永井清和教授が就任した後は、第二病理学教室が担当となった。病理部門の最初の専任スタッフは、昭和 43 年に大阪大学医学部第二病理学教室から赴任した宇多弘次助教授である。宇多助教授が着任した後は、病理診断業務は、基礎講座の病理学教室の手を離れた。昭和 50 年に宇多助教授が大阪大学に戻った後は、第二病理学教室（永井教授）が急遽、病理部門を支えることになった。その後、第二病理学教室から専任スタッフとして昭和 52 年に宮本一雄助手が、昭和 53 年には西野栄世助手が移籍した。昭和 57 年以降、中峯寛和助手と小野一雄助手が赴任し、助教授に昇格した西野と共に 3 人の専任病理医体制で病理部門を担当した。三家教授時代初期に西野助教授が退職し、続いて講師に昇任していた中峰講師、小野一助手も順次退職したため、平成 16 年に第二病理学教室（覚道教授）から森一郎助教授と尾崎助手が移籍派遣され、専任スタッフとなった。その後、森助教授と交代で中村靖司助教授が移籍し、安岡（第二病理学教室）、児玉理恵子、植田真知子が助教に着任した。

3. 臨床医学講座への転向とこれからの人体病理学教室

上述したように平成 25 年、旧第二病理学教室は臨床検査医学教室・病理部門を統合し、さらに臨床医学講座に移籍して、人体病理学教室／病理診断科を標榜することとなった。上記のような大改変が行われた背景には、従来、基礎研究を主体としてきた病理学教室を取り巻く環境の変化がある。病理学は、基礎医学というイメージが強く、実際に基礎的研究が重要であることは従来通りであるが、近年では、厚生労働省の医道審議会標榜部会において、「病理診断科」の標榜が承認されるなど、病理学は内科や外科などと同等に臨床診療科の一員としての一面も求められている。臨床医からは病理診断の質の向上が求められ、従来ありがちであった研究の片手間に行う病理診断や一方通行の病理診断ではもはや臨床現場からの期待には応えられない時代になった。言い換えれば、病理学が、基礎医学のみならず、医療現場においても、より大きな役割や責任を求められる立場になったと言える。一方で、日本の病理学は現在、病理医不足や高齢化という大きな問題に直面している。人口 10 万人に対して病理医の数はアメリカで約 6 人であるの

に対して、日本は約 1.3 人しかおらず、和歌山県にいたっては病理専門医が 1.1 人と全国最下位である。このような環境を踏まえて、新しい人体病理学教室では、人材の育成を目指し専任スタッフ 7 名が認められた。2015 年 1 月の新体制スタート時には、村田教授（旧第二病理学教室より移籍）、小島講師（新任）、児玉助教（臨床検査医学教室より移籍）、割栢助教（旧第二病理学教室より移籍）、松崎助教（旧第二病理学教室より移籍）、岩橋吉史研究生（臨床検査医学教室より移籍）、赤松裕子非常勤医師（新任）、原重雄非常勤医師（神戸大学講師）（新任）の陣容であった。その後、児玉助教は非常勤医師となり、京都大学から藤本正数助教が赴任した。

以上、基礎医学講座としての第二病理学教室から臨床医学講座として人体病理学教室への変遷と歴史を記述した。新しい人体病理学教室は、質が高く、科学的・論理的な病理診断、病理学的研究と論文発表、優秀な病理医や細胞検査士の育成を行うことによって、病理学の発展に努めて行こうとしている。



村田 晋一教授

<2015 年 11 月 1 日和歌山県立医科大学創立 70 年記念誌原稿より>